〈伝説の学生運動〉を3時間20分に圧縮した長編ドキュメンタリー

存在の路上を
割り走り投げ
声をかぎりに
橋を渡れ
橋を渡れ

〈佐々木幹郎
詩集『死者の鞭』より〉

代島治彦監督作品

きみが死んだあとで

Whiplash of the Dead

1週間限定
アンコール
上映決定
11/20(土)〜26(金)

❖**上野 千鶴子**（社会学者）
きみの時間はあの日で止まったままだ。
きみが死んだあとで…
どのひとにも長いながい時間が流れた。
わたしは、わたしたちは、
いったい何をしたのか、
そして何をしてきたのだろうか？
何一つ片付いてなど、いない。
ずしんと腹にこたえる映画だ。

❖**内田 樹**（思想家・武道家）
僕もあの時代に友人を内ゲバで二人失った。
はからずも生き延びた以上は
彼らのことと、
彼らがめざしていたよきものを記憶し、
言葉にして伝えるのが、
生き残ったものの義務だと改めて思った。

❖**加藤 登紀子**（歌手）
一人の死が終わりではなく、
鮮やかな始まりとして語られる。
山崎くんの死はその意味で特別でした。
関わった人たちの率直な言葉に向き合って、
もう一度私自身の16歳からをたどる
貴重な時間になりました。

❖**森 達也**（映画監督・作家）
山崎はなぜ死んだのか。誰に殺されたのか。
そして時代はどのように変わったのか。
あるいは変わらなかったのか。
かっこよかったお兄さんとお姉さんたちは
何を語るのか。
あるいは何から目をそらすのか。
目撃するのはあなただ。

『きみが死んだあとで』
（日本／2021年／200分（上巻：96分／下巻：104分）／DCP／5.1ch）
製作・監督・編集：代島治彦
撮影：加藤孝信／音楽：大友良英／写真：金山敏昭、北井一夫、渡辺 眸／
整音・音響効果：滝澤 修／カラーコレクション：佐藤 健／字幕デザイン・宣伝美術：鈴木一誌、吉見友希／
制作：スコブル工房／配給：ノンデライコ／宣伝：テレザ／企画・製作：きみが死んだあとで製作委員会

1967年10月8日。佐藤栄作内閣総理大臣（当時）の南ベトナム訪問阻止を図った「三派全学連」を主体とする第一次羽田闘争は、その後過激化する学生運動の端緒となる事件だった。はじめてヘルメットやゲバ棒で武装した学生は羽田空港に通ずる弁天橋で機動隊と激突。そのなかで一人の若者が殺された。山崎博昭、18歳。機動隊に頭部を乱打されたためか、装甲車に轢かれたためか、死因は諸説あるが、彼の死は同世代の若者に大きな衝撃を与えた。

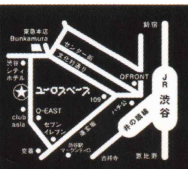
あれから約半世紀。亡くなった山崎博昭の高校の同級生たちや当時の運動の中心だった者たちは齢を重ね、山崎だけが18歳のままだ。生き残った総勢14人が語り継ぐのは美しく輝く青春とその後の悔恨。闘争の勢いとその衰退も振り返りながら、さまざまな記憶と感情が交錯する。青春だけが武器だった、あの“異常に発熱した時代”は何だったのか。「きみの死」はまだ終わっていない。半世紀を経てもなお、その宿題は続いているのだ。

〝歴史と記憶のはざま〟が浮かび上がる——生き残った者のナラティブ（語り）で織り上げた長大なタペストリー

上・下巻合わせて3時間20分の大長編にまとめきった代島治彦監督は、『三里塚に生きる』『三里塚のイカロス』に続いて“異常に発熱した時代”に三度組み合った。インタビュー中心のストイックな構成は、“歴史と記憶のはざま”を浮き彫りにし、ナラティブ（語り）によって織り上げられたタペストリーのようだ。音楽・大友良英が作曲したフリージャズをベースにしたアナーキーな主題曲が重なり、時代の狂気と美しい記憶が混然一体となって押し寄せてくる。代島も大友も学生運動が熱を失った後の「しらけ世代」。権力と闘い、革命を叫んだ「全共闘世代」への愛憎を忍ばせながら、彼らの歴史的功罪を問う重厚なドキュメンタリーが誕生した。

◆連日豪華トークイベント◆
※すべて上映後、代島治彦監督とのトーク

11/20㊏ **加藤 孝信**（本作撮影・キャメラマン）
11/21㊐ **大友 良英**（本作音楽・ミュージシャン）
11/22㊊ **北井 一夫**（本作写真・写真家）
11/23㊋㊗ **山根 貞男**（映画評論家）
11/24㊌ **森 達也**（映画監督・作家）
11/25㊍ **鴻上 尚史**（劇作家・演出家）
11/26㊎ **加藤 登紀子**（シンガーソングライター）

11/20㊏～26㊎
アンコール上映
連日11:00～

ユーロスペース
EUROSPACE
渋谷・文化村交差点左折
TEL：03-3461-0211
www.eurospace.co.jp